
条例都市。

三衣 千月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

条例都市。

【Nコード】

N5429BA

【作者名】

三衣 千月

【あらすじ】

・mixi日記よりお引越し&追記。

どこかの国の、いろいろな街のお話。

それぞれの街には“ある条例”があつて、街の人たちはその中で暮らしています。

“ある条例”は、誰が考えたのか、そもそもどんな理由で作られたのか。

誰も、知らないのです。

そんな国の、それぞれの街にある、それぞれの条例の中で日常を生きていく人々。

そんな彼らの日常をつらつらと書き連ねた短編集。

1話完結型なのでどの話から読んでいただいてもOKです。

星降る街

12月4日。

街には、イルミネーションの光があふれ出していた。

駅前の広場には大きなツリー。行き交う人々は皆どこか忙しそうだ。

ここは、さほど大きな街ではないにしろ通り一遍の施設は揃った
なかなか暮らしやすい平凡な街。

ここに越して来て数年になるが、不便さはあまりない。

どこからか、毎年この時期に耳にする曲が聞こえてくる。

「いいのかね。俺だけこんなにのんびりしてて。」

ブラウンのコートに手を突っ込んだまま呟く。

ツリーがよく見える駅前広場の時計の下で柱にもたれかかりながら。

世間があわただしいと、こっちまで忙しい気分させられる。

つつい乗せられて仕事のあれこれを考えてしまいそうになるが
休日は休日らしく羽を伸ばすのが正解だろう。

道行く人々には申し訳ないが存分にのんびりさせてもらおう。

今日と明日の二連休とはこの年末の忙しい時期にありがたい。

「もっとも、明日は働きたくても働けないからなあ。
……にしても遅いなアイツ。」

携帯電話を見やる。

13時39分。小さな液晶にそう表示されている。
待ち合わせは確か13時だったはずだ。

大方、寝坊だろう。

いつものことながら少々腹が立つ。

そのとき、ガードレール越に一台の車が止まった。

窓が開いて、車の持ち主がこちらに手を振る。

遅れたことを気にしている素振りはいまひとつなさそうだ。

招かれるままにドアを開けて古めかしい車に乗り込む。

がちゃ

ぎいっ

ばたん

ぎし。

ずいぶんと年季の入った音がする。
この車に乗り込む時にいつも思う。

「……いい加減、代えたらいいのに。車。」

「何を言うか！まだまだ現役。快適に走るぞ？」

「快適に走る割には大遅刻だけだな。」

少し慚然とした表情をとって遅刻を問い詰めてみる事にした。

「やあ、すまん！車の調子はいいんだが道が混雑しててな！！
こればかりはどうしようもナイ！」

「まったく……。調子のいいやつめ。」

「おう、車も俺もな！！」

「うまくねえよ。」

「なあんだよ。怒るなって。冷たいなあ。」

「この寒空に30分以上待たされたんだ。心身ともに冷たくもなる。」

「悪い悪い。と、思ってたさ。ほれっ。」

運転席から缶コーヒーが飛んできた。

ジョージアのエメラルドマウンテンブレンド。

いつも好んで飲んでいる銘柄だ。こういう所には気が利くやつだと思っ。

それが逆に腹立たしくもある。

「仕方ないな。どうせ、道が混むことを忘れてたんだろ？」

かきゅっ

缶コーヒーのタブを起こし、冬の街を眺める。

ゆっくり動き出す景色とラジオから聞こえてくるクリスマスソング。

「ははっ、ご名答」 俺はこの街に住んでる訳じゃないから、全然慣れないんだコレが。」

「仕方ないさ。俺も最初はびっくりしたしな。」

この街には、他の街にはない一つの条例がある。

それ以外は、本当に何の変哲も無い平凡な街なのだ。

条例を誰が作ったとか、どういった経緯で作られたとかは知らない。

あまり気にするものでもないし、気にした所で変わらない。

「まあ、最近は慣れてきたしな！」

さ、明日の条例に備えて買出しと行きますかー!!」

「慣れてきたって？どの口がそれを言うんだよ。

半年前のこと、忘れてないからな。」

「ま、まだ根にもってんのかッ！？暗い！暗いなー。

あんまりヨクナイよ？そういうのってさー。」

「アイス買い込むのは禁止。な？」

「この寒いのにアイスなんか買わねえよ。

でも、ありゃ悪かった。大惨事だったもんな。」

「ほんと。冷凍庫の中が見事にバナラチョコミックスだったからな。

「

それを言うなって。散々謝つたろ？」

何気ない会話が、冬の快晴の空に消えていく。

この分だと、今夜もきつと快晴だ。

離れていくツリーをバックミラー越しに覗きながら
ふとそんなことを考えた。

食材や燃料を買い込み、家に帰り着いたのは自分の家だ。

閑静な住宅街にある、普通の一軒屋。少し高台にあるので、
屋上に上れば周りの景色がよく見える。

もう17時だ。少しのんびりしすぎたかも知れない。
急いで準備をしなければ。

「相変わらず広いよなあ。」

一人でこの家は寂しくないか？」

「毎回同じ事を聞くなつて。不自由しないし、何より気楽だ。」

「・・・変なヤツ。」

「何を今更。その変なヤツのおかげでそれが役に立つんだろ？」

「まあね。あと、条例のおかげでな」

「ははっ、もつともだ。屋上へのドアは鍵開けてあるから。
俺は食事の準備を済ませるさ。」

「了解。」

がちゃがちゃと物音を立てて、抱えた荷物を運んでいった。
あんなに乱暴に運んで大丈夫だろうか。けっこう繊細な部品も多い
と思うのだが。

まあ、こっちは台所で今晚と明日の食事を作らないとな。
月に一度の条例のせいとは言え、まとめて作るのなかなか大変で
もあり楽しくもある。

そして19時。

出来上がった夕飯を共に食べる。

誰かとの他愛無い会話もなかなか楽しい。

「うまかった。ごちそうさん」

「どついたしました。屋上の方、準備は？」

食器を流し台に運びながら訪ねると、

炬燵で寝ころがりながらの返事が帰ってきた。

「準備万端万事万全 キレイに晴れてるし言うことナシ

今日はよく見えるぞー!!! うーん天文部の血が騒ぐ!!!」

親指をびつと立てて、合図を返してくる。

毎月のことながらテンション高いなコイツ。

「元・天文部だろ?ま、プラネタリウム並みの解説を期待してるさ。

寝転がってないで風呂入ってきたらどうだ？元部長。」

「まかせろい。ってお母さんかお前は。この元幽霊部員め。」

「早くしないと入れなくなるからな。今日は。」

「ああ、そか。はいよ。・・・覗くなよ？」

「お前のバスタイムに興味はない。」

「・・・毎回言っつて飽きないか？そのネタ。」

「ちえっ。つれないヤツ。」

23時。

家事を済ませ、二人で屋上へと上がる。

街のイルミネーションは遠目に見てもきらきらとキレイで
駅前のツリーは中でも特に煌びやかに輝いている。

街灯や家の明かりもこぞって夜を照らす。
移り変わる信号機や、ビルの航空灯も参加して。

屋上のフェンス越しに見る街はまるで星空だ。
天上の星が霞んで見える。地上の星に照らされて
夜のベールにはかろうじてシリウスが瞬くだけ。

「やー、冬のダイヤモンドも北極星もまったく見えねえなあ。」

「まあ、もうしばらく待てば見えるさ。
その天体望遠鏡も無駄にはならないと思うぞ。
それまではまあ、紅茶でも飲もう。」

「そうだなー。」

屋上に置いたアウトドア用のバーナーにケトルを置き湯を沸かす。
出来上がった紅茶にブレンダーを数滴。

紅茶を飲みながら、天体望遠鏡の調整をしたり話をしたり。
そうこうしている内に、地上の星が一つ姿を消した。
駅前大きなツリーの灯りだ。黒の中にふっと消えた。

「お、24時か。」

ツリーを中心に、街の星々が見る間に消えていく。

街灯や家の明かりも。

移り変わる信号機や、ビルの航空灯も。

さっきまでは天上を覆っていた黒の大きな布が、

今度は地上に降りて街を覆う。

騒がしかった灯りが消え、黒と静寂に街が飲み込まれた。

隠し布をはずされた絵画のお披露目に、緊張にも似た心持ちで上を見上げた。

ベールの無くなった天には、所狭しと星がにぎやかに瞬いている。

シリウスはもちろん、うつすらと流れる天の川も見える。

こんなに星があったのかと、毎回の事ながら思う。

言葉が出てこない。

「おっっ！！見える見える！！
カストルにポルックス！アルデバラン！！
源氏星も平家星もばっちり見えるな。」

となりにいる天文ヲタクは言葉が出るようだ。

「・・・おい。元部長。

もうちょっと、こう、感動に浸る時間とかないか？」

「感動してるぞ？見てみる！あのベテルギウスを！
我らが平家星を！！変光星の中でも特にはつきりとした変」

・・・中略・・・

ので、あと3年もすればまた明るくなってくる訳だ。
って・・・聞いてないな？解説をご希望だろ？」

「聞いた時だけでいい。」

「つまんねーな。」

ま、いいや。望遠鏡覗いてるから、何かあったら言ってくれ。」

「ああ。」

街の灯りは全て眠りの中。

満天の星空にざわざわと心がくすぐられる感覚は何ともいえず心地いいものだ。

満天の星空を眺めながら、灯りの消えた街にも目をやる。

明日のこの時間まで、街はこのままだ。

街に灯りは一切灯らない。駅も、信号も。

月に一度、街への一切の電力の供給が一日だけストップするのだ。

故に、電車も走らないし店も開かない。

信号も止まるので車両は運転禁止。

それが、この街の条例。

「毎月5日は完全停電条例・・・ねえ。」

「俺は好きだぞ？こうして存分に星が見れるし」

望遠鏡を覗き込んだままの姿勢で、独り言に対して返事が返ってくる。

俺も星空は嫌いではない。

この街には、他の街にはない一つの条例がある。

それ以外は、本当に何の変哲も無い平凡な街なのだ。

条例を誰が作ったとか、どういった経緯で作られたとかは知らない。

あまり気にするものでもないし、気にした所で変わらない。

この街に住んでいる限り、この条例は日常であり普通なのだ。

他の街に住む人間からは非日常的に写っても、日常は変わらない。

ここは、月に一度必ず停電する街。

観光パンフレットはこう言う。

“星の降る町”と……。

·
e
n
d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5429ba/>

条例都市。

2012年1月14日22時49分発行